

これからの 学校

第3回 高知県立山田高等学校

探究する学校

このコーナーでは、学校の歴史や社会・地域の実情、生徒の特徴などを踏まえてスクール・ポリシーの策定や教育課程の編成を行い、特色ある取り組みを実践している高校の事例をご紹介します。

Point

- ☑ 「探究」を軸に3学科が地域課題に取り組む
- ☑ 行政・地元企業・大学生が探究活動を支援
- ☑ 探究活動で生徒の成長を示し、地域からの信頼を



校長
市原庸寛 先生



普通科
戎井淳 先生



グローバル探究科
濱崎麻衣 先生

入学者数の激減に危機感 学校の魅力化が喫緊の課題に

高知県中東部の香美市にある県立山田高等学校は、市内唯一の高校として、「地域」をキーワードにさまざまな探究活動に取り組む「探究する学校」を標榜している。

同校が「探究」を軸にした学校づくりに大きく舵を切ったのは、2016年度のことだ。その背景には、香美市を含む県内中山間地域で急速に進む少子高齢化の影響や、県立高校の通学区域撤廃に伴う高知市への生徒流出などにより、入学者の減少が続くことに対する危機感があった。「『電車に乗って高知市内の高校へ通う』ことをステイタスとする地域の風潮もあり、入学定員充足率は落ち込む一方でした」と市原庸寛校長は語る。

志願者の減少は志願者間での競争を失わせ、基礎的な学力に課題を抱える生徒の増加を招くことになる。また、高知県が基礎力診断テストと、併せて実施するアンケート調査のデータを分析したところ、基礎学力の未定着と自己肯定感の低さという相関関係も浮き彫りになった。学力コンプレックスが一因となり、「自分のことが好きである」「自分という存在を大切に思える」など、自己肯定感に関する項目についての肯定的な回答率が、山田高校は県平均よりも10ポイントも低かったのである。

「素直で真面目な生徒が多いのですが、学校に対する

住民の期待感は薄く、『元気のない学校』『特色のないのが特色』などと評されていました。地域からの信頼を得るためには、入学者の増加、基礎学力の定着・向上、そして自己肯定感の醸成という三位一体の問題への対策が喫緊の課題でした」（市原校長）

歴代校長が中心となって学校改革が進められるなか、生徒の成長を促す契機となったのが、2016年度に県の事業受託により発足した「山田高校学校地域協働本部事業」だ。香美市は、保育園・幼稚園から小・中学校、高校、大学までが揃う学園都市。その教育資源を活用し、地域住民や地元企業の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えながら「学校を核とした地域づくり」をめざすという内容である<図表1>。その中核を担ったのが、山田高校が総合的な学習の時間で行い、現在も同校における教育の柱として継続されている「地域課題探究学習」だった。

「市や県の方に地域の現状や課題を語っていただき、地元企業には生徒のインターンシップなどにご協力いただく。市内にキャンパスを構える高知工科大学の学生さんにはファシリテーターとして、本校生徒の探究活動のサポートを依頼。“よってたかって”をキーワードに、香美市全体が一体となって生徒を育て、地域に活力をもたらすことを目標とした取り組みです。香美市のように少子高齢化による人口減少が深刻な中山間地域の高校を活



性化させることで、地域が元気になる。そんな成功モデルを本校が作ることで、他の中山間地域の高校も希望を持てるのではないかと期待し、探究を軸とする学校改革にチャレンジしてきました」(市原校長)

そして2020年度、グローバル探究科を新設するとともに、従来の商業科をビジネス探究科に名称変更し、普通科と併せた3学科編成で「探究する学校」として新たな一歩を踏み出した。

「探究する学校」としてリニューアル 3学科の特色ある取り組み

各学科の探究活動について具体的に見ていく<図表2>。

普通科は、かねてから積み上げてきた「地域課題探究学習」をブラッシュアップした内容になっている。

1 年次前半 地元企業のCM制作

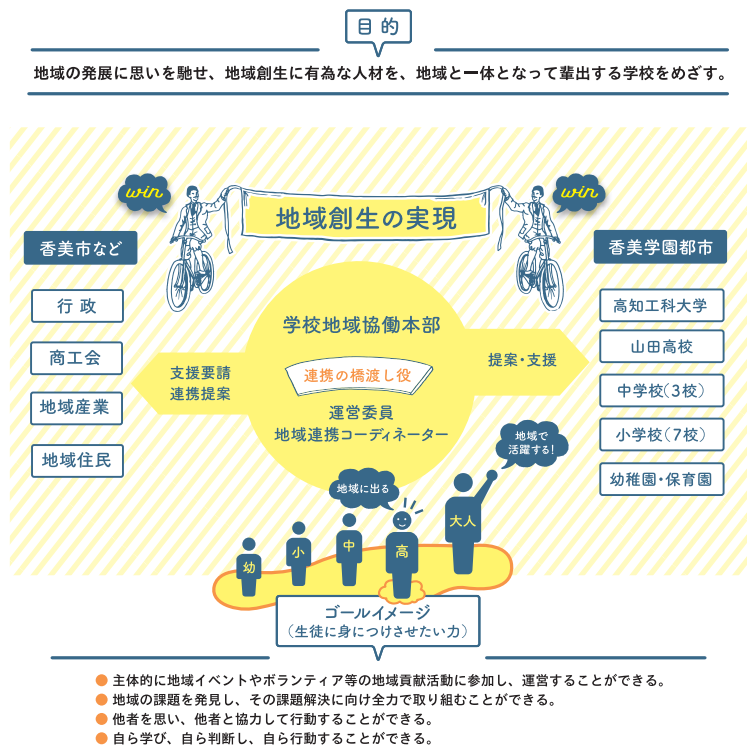
3～5人のグループで地元の企業にインターンシップとして入り、各グループがセールスポイントや魅力を調査し、企業CMを制作。作品は、毎年9月に開催される地元商店街のイベントの中で発表の運びとなる。

「元大手広告代理店のクリエイティブディレクターに講師・審査員として参画していただくなど、生徒たちは外部の方に濃密にかかわっていただき、生徒たちは刺激を受けながら一生懸命、制作に取り組んでいます。出来のいいCMを作ることが目的ではなく、取り組みを通して課題の発見や課題の設定などを体感として学ばせたいという狙いがあります。発表会にはご協力くださった企業はもちろん、市長や商工会議所の方もお見えになります。そうした大勢の方たちの前で発表するのは、生徒たちにとって大きな経験になっています」(普通科 戒井淳先生)

1 年次後半 市長へのまちづくり提言

香美市と隣接する南国市・香南市の3市が、高校生に考えてもらいたい課題を提示。生徒らが解決に向けて考えた「まちづくり提言」を市長に向けて行う。ちなみに今年度で8年目を迎えたこの取り組みから実現した事例の1つとして、南国市のご当地キャラクター「シャモ番長」の誕生がある。

図表1 山田高校学校地域協働本部事業



※山田高校学校地域協働本部事業報告書(2018年3月発行)より



南国市PRキャラクター「シャモ番長」

2 年次 高知県への政策提言

高知県が抱える課題を自ら発見し、課題解決の道を探っていく。

「初年度には、当時の高知県知事に県の現状を話に來ていただき、知事の前で政策提言を発表しました。県知事と直接接する機会などめったにありませんから、生徒たちの緊張感たるや大変なものでした。回を重ねるたびにこの取り組みの輪が他校にも広がり、5年前からは県内全高校の約半数にあたる18の高校と連携し、合同発表会を実施しています。いろいろな学校のユニークな取り組みが垣間見えて、生徒達もとても楽しみにしているようです」(戒井先生)



図表2 めざす生徒像(学校全体・各学科)

学校全体でめざす生徒像			
既存の発想に捉われず、チャレンジ精神を持ち、新しい価値を社会に創造することができる人物			
	普通科	グローバル探究科	ビジネス探究科
めざす生徒像	地域を理解し、地域が抱える課題を認識・発見でき、他者と協働して課題解決に取り組み、将来、地域づくりの中心を担う志を持っている生徒	答えが容易に見いだせない問いを立て、自分なりの答えを見だし、他者を納得させられる表現ができ、卒業後も自ら探究活動ができる生徒	ビジネスに関する探究心を持ち、企業経営者に興味・関心を抱かせられる事業計画書を作成することができ、将来、起業家として地域産業の振興に貢献する志を持っている生徒
取り組み	地域が抱える強みや課題を探究することを通して、自分の未来をつくり上げる	地元の大学や公立研究機関等と連携しながら、学術的なスタンスで自分の興味・関心に沿った探究活動を展開する	地域貢献を志向するビジネスパーソンとしての未来の自分の基礎をつくる

※取材を基に河合塾作成

3年次 個人探究

探究のノウハウが身についた3年次は、自分の興味・関心や進路に即した個人探究を行い、論文にまとめる。戎井先生は、普通科の3年間でめざす生徒像について、次のように補足解説する。

「高知県に限ったことではないでしょうが、県内の高校生の多くは地元に関心がなく、地元のことを知りません。特に香美市に住んでいる子どもたちは都市部への憧れが強く、成績上位層は高知市内に流れてしまいがちです。高知県では毎年1万人ずつ人口が減っており、地域を支えていく子どもが減ると、高知県の未来もない。地元に関心を持ち、地域に貢献したいという意欲を持った生徒を育てたい。そんな思いを込めたプログラム内容になっています」

学科再編成の目玉となった**グローバル探究科**は、3年間を通して答えが容易に見いだせない問題に果敢に取り組み続ける生徒の育成をめざす。

1年次の「探究リテラシー」では地域の課題を中心に探究の意義やノウハウを学び、2年次は地域から日本へ、地域から世界へと課題の発見・設定の視点を拡大した「グローバル課題研究」に取り組む。3年次1学期に論文をまとめ、その後は「自分の夢をかなえる探究」をテーマに、自ら問いを立てながら実践的探究を深めていく。同学科の大きな特色の1つに、1～2年次のグループ探究活動に大学生のメンターが伴走する、高大連携の手厚いサポート体制がある。グローバル探究科長の濱崎麻衣

先生に詳細をうかがった。

「本校の卒業生も多く在籍する高知工科大学と緊密に連携しながら探究活動を進めています。2023年度は、理工学群^(注)、情報学群、システム工学群、経済・マネジメント学群などから、大学院生を含む14名の学生さんがサポートに来てくれました。資料の探し方やグラフの作成方法など、探究のノウハウをアドバイスしてもらっているのはもちろんですが、目に見える身近な場所に大学生がいるのは、生徒にとってよきロールモデルになると感じています。2023年度はグローバル探究科の一期生のOBが3名サポーターとして携わってくれましたが、“経験者は語る”で、『私も同じような部分で行き詰まったけれど、ここを乗り越えたら課題解決への道筋が拓けたよ』などと、自分の体験を踏まえて生徒の気持ちを汲み取りながら親身にアドバイスしてくれる。そこがいいなあと思いました」

探究活動を通して進学に向けた学習意欲も高まり、昨年度卒業したグローバル探究科一期生のうち、**国公立大学をめざした生徒全員が見事合格を果たした**という。

前身の商業科時代から地域の企業と協働でさまざまなプログラムを展開してきた**ビジネス探究科**も、アントレプレナーシップを基軸にした探究プログラムの充実化を図っている。1年次に簿記や商品開発など、商業の基礎科目を習得。2年次には、香美市の商店街で展開されるチャレンジショップで、自分たちが仕入れてきた商品の販売実習などを行う。さらに「商品開発」の授業では、

(注) 2023年度より環境理工学群を理工学群に名称変更。



外部から講師を招き、起業家に必要なマインドセットについて学ぶ。そして、3年次には高知市内の商店街にフィールドを広げ、販売実習にチャレンジする。

過去にも、生徒が商品開発した饅頭「高校三年生の山田まん」が、老舗菓子店のロングラン商品になるなどの実績を持つ同学科だが、近年も地域の名産であるニラを使った惣菜を考案し、地元のローソンの店内製造弁当に採用されたり、西日本高速道路のサービスエリア内にある食堂とコラボし、新メニューを開発するなど、新たな取り組みで地域の注目を集めている。

生徒はいかに変わったか？ 自己肯定感の向上と進学希望者の増加

探究を軸にした新体制後、生徒と学校はどのように変化したのだろうか。普通科の戒井先生によれば、地域課題に取り組むなかで、探究する楽しさを知り、「もっと学びを深めたい」と、大学進学を希望する生徒が増えているという。同時に、年2回実施している前述のアンケートのデータ解析の結果を見ても、自己を肯定的に捉える生徒が多数派を占めるようになった。

「探究活動やフィールドワークにより、外部の人と関わる、書籍・資料と関わる、地域の人々や企業と関わることで、主体性と自己肯定感がしだいに醸成されていったのではないかと感じています。たとえば、普通科の生徒で入学時には『将来は消防隊員になりたい』と就職を考えていた生徒が、CM制作のプロであるクリエイターの方から、『君が作ったCMは、一見したところ荒唐無稽に見えるけど、この視点はすごく斬新でおもしろいね』とベタ褒めされたのを機に、勉強もどんどん頑張るようになり、高知工科大学に総合型選抜で合格し、大学進学を果たしました。また、『コピーライティングが抜群にいい』と褒められた別の生徒は、同じく総合型選抜で高知工科大学に新設されるデータ&イノベーション学群に合格しました。二人とも、探究をやっていなかったら大学進学は考えなかったかもしれません」（戒井先生）

一方、グローバル探究科の一期生が卒業するまで持ち上がりで指導にあたり、生徒たちの成長をつぶさに見てきた濱崎先生は、3年間の探究を通して“伸びた面”が2つあると感じている。

「1つは探究する心、もう1つは表現する力です。私



地しようがを使った「高校三年生の山田まん」（現在は終売）

の印象だけではなく、これらはルーブリック評価にも表れています。3年間、一生懸命探究に取り組んだ結果、どのような事象を見ても、『背景には何があるのだろう』と考察する習慣がつき、自分の考えを自分の言葉で表現できるようになっていったのです。当初は、人前に出るのが苦手でモジモジしていた生徒が、発表を重ねるうちに身振り手振りも入れて、観客の様子を見ながら話ができるようになるケースもありました。それがひいては、学校推薦型選抜でも何を聞かれても恐くないという自信につながり、進学実績にもつながったのでしょう。二期生である今の3年生にも同じ傾向が見て取れます」

成長する生徒の姿を地域に発信し 「探究する学校」への理解を促す

生徒の変化を肌で感じつつも、地域からの信頼を確かなものにするには課題も残ると市原校長は言う。

「香美市では年に一度、地域をあげて『よってたかって生涯学習フォーラム』というイベントを実施しており、その中で本校3学科の成果発表会も行っています。“地域とともに、将来、地域に貢献できる子どもたちを育てているんだ”という気運が醸成されつつある今、発信の機会を有効に使って、探究することで生徒たちがどのように成長しているか、強い思いを持って住民の皆さんにお示し続け、信頼を勝ち取っていききたいですね」

新設で認知度がまだ低いグローバル探究科の取り組みをInstagramや学校通信で紹介する試みも始まった。これからの社会に必要な不可欠な資質・能力を育成する学科として、積極的にアピールしていく方針だ。

「鉄とクロムとニッケルを合わせることで、錆びないステンレス鋼が出来上がるように、『探究』を中核に3つの学科が三位一体となって教育活動を展開することで、地域の学校として新しい価値をクリエイトしていきたい」と、市原校長は力強く抱負を語ってくれた。